

言ナリ、其故ハ、ハクランノ藥ハ、ハクランヲ煩フ者ガ吞霍亂ノ藥ハ、霍亂ヲ煩フ者ガ用ユル事ゾト申アレシトナリ、

〔先哲叢談後編二〕白田畏齋 名可久、號畏齋、通稱五郎左衛門、本姓坂口氏、備前人、略中

或勸畏齋以祿仕、不答、勸之教授爲業、又不答、勸之煉藥而鬻於市、從之、自讀方書、製地黄丸益氣湯類、尤窮力於磨研蒸搗矣、人皆曰、斯人而煉斯藥、劑料必眞、脩治必精、買者頗衆、從是之後、衣食聊足云、

〔守貞漫稿五生業〕是齋賣。消暑ノ抹藥也、東海道草津驛ノ東ニ梅木村ト云アリ、其所ニ此藥舖五六

戸アリ、一戸ヲ是齋ト云、其他定齋等ノ音近キヲ名トス、

蓋藥名和中散ヲ本トス、大坂市街ニ賣ル者ハ、住吉神社北天下茶屋某ノ家ニ製ス、夏日ノミ大坂ニ賣巡ル者數夫、各一樣ノ襦袢ヲ著ス、地白木綿ニ濃鼠ノ碁器ノ形ニ似テ、五分許ノ小紋ヲ染タリ、江戸ハ府内三戸アリ、是又夏月ノミ賣之、所荷藥管ノ文字記號管朱漆青貝等ヲ以テシ、又擔之夫ハ、步行ニ術アリテ、藥管ノ鑲ヲ鳴シ、笠ヲ用ヒズ、又江戸ノ西大森村ニ和中散ノ店アリ、藥磨ノ車等ヲ設ケテ、前ノ天下茶屋ニ似タレドモ、夏月市中ニ賣巡ルコトヲセズ、世事談曰、定齋藥ハ、大明ノ沈惟敬、本朝ニ來テ靈藥ヲ秀吉ニ獻ズ、茲ニ大坂藥種屋定齋ト云モノ、俳優ヲ好シ、秀吉申猿樂ヲ催ス時、召ニ應テ意ニ合ヒ、彼名方ヲ授ク、定齋業之トス、故ニ名トス、今京東洞院青木屋ハ定齋ノ裔也云々、然バ本名定齋也、

枇杷葉湯賣。是亦消暑ノ散藥也、京師烏丸ノ藥店ヲ本トス、三都皆稱之、又三都扮、蓋京坂ハ、巡リ賣ヲ專トシ、江戸ハ橋上等ニ擔管ヲ居テ息ヒ賣ヲ專トス、又大坂元舖天滿ニアリ、賣詞ニ曰、御存本家天滿難波橋朝田枇杷葉湯云々ト云、

〔都の手ぶり〕兩國橋

かたつかたに人あまたつどひたてる所あり、何ぞとよりてのぞけば、くろき管ふたつならべ、こ